

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成十七年三月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十一卷第十一号（通巻第一三一号）

鈴



誓子

山口誓子先生追悼号

第131号

俳句雑誌

GLOCKE

3. 2005

# 卒業歌

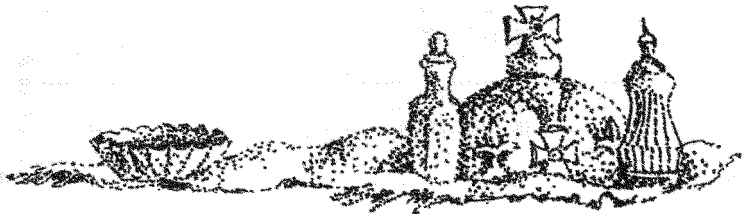
品川 鈴子

締め切りに追はれながらの二月尽

卒業の名は呼び捨てに袴の師

詰襟の長身が指揮卒業歌

この気持ち何だろうかと卒業歌



卒業の列担任へ振り向かず

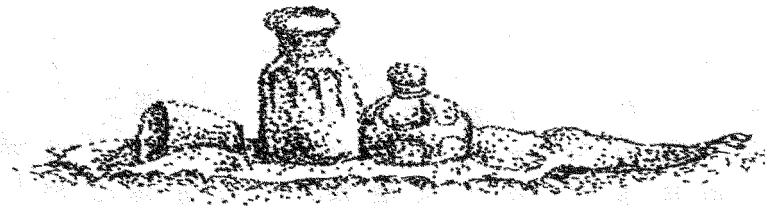
「誰方？」とて応へぬノック春一番

弁慶の投込岩に蝌蚪たかる

チューリップいぢけ芽出づる誕生日

ホスピスのロビーに七段雛飾り

殿の庭あたふたすなと囀れり



# 玉 鈴

兵庫 藤田かもめ

海中わたなかの巖いわに松の色変へず  
菓子かしの祖そに葉つき橘たちばな供へられ  
名の木枯る鱗うろこ街道の逸はなれ猿  
吟行ぎんぎょうに狐火見しと真顔まへんなる  
岬鼻さしなに向けて宜候冬の航

大阪 藤田 京子

照紅葉鐘里帰りの道成寺  
浮島うきじまに拾いし紅葉小判もち  
トロツコの列車降りれば櫛紅葉  
海にまで星いっばいのカシオペア  
根来寺ねらいでらに弾痕残り夕紅葉

兵庫 史 あかり

初時雨絵は饒舌にぎはなに無言館  
冬ぬくし名刺の要らぬ初対面  
なで肩に女の矜持けいぢ一葉忌  
前頭葉隠して目深冬帽子  
眠剤みんざいに頼る木枯し吹く夜は

# 吟

愛媛 星加 克己

石鎚山いしづちのいづれの峯の鷹たかならむ  
ふるさとの山河物言へ朱纒しゆまの実  
遠とほざかる牡蠣かきの岸壁しづま島渡船しまわたし  
冬枯れし海水浴の注意書  
雪蛭母ゆきむすめの吐息とこの濡れぬたり

香川 細川 知子

新旧が混じりしおつり一葉忌  
駕籠かご昇かきより若き客乗せはおかぶり  
駕籠かご昇かくも乗るのも力み留守詣  
神無月巫女の黒髪くろかみのびそろふ  
竜の玉物腰たまものこしひくく商へり

兵庫 細野 恵久

三月や赤児あかごは足の指反らす  
地虫ぢむし出づぐるぐる試すボールペン  
春の波双胴船ふたごぶねを抜け出会ふ  
木の芽時煙突けむりど四本はて三本  
自転車じてんしゃのドミノ五台目春疾風

香川 松井 洋子

返り花全校七名の分枝に  
島に立てば足裏に堅き木の実かな  
秋蝶に人麻呂歌碑へと案内され  
日時計に影ぼんやりと冬に入る  
小春日や浜果つるまで流木群

愛媛 松本 恒子

懸崖菊「あ・うん」の形町役場  
湖の群青破るかいつぶり  
名を忘る人の饒舌ちゃんちゃんこ  
釣好きの焼諸屋来る防波堤  
菰巻にされし蘇鉄や法の庭

愛媛 三浦 如水

舞ひ納む扇おうち箒かがりに投げ入れて  
鎌動かし生確かむる枯蟻螂  
枯野行く止まれば己れ枯るゝかも  
自動ドアー開き師走の人を呑む  
石投げて眠る寒水驚かす

愛媛 三浦 澄江

ひたむきに生きし歳月白水仙  
二人には二人の秋思雲を追ふ  
ゆつたりと羽織る齡やちゃんちゃんこ  
太陽に軽さを貰ふ干布団  
夜長の灯尖り突き出す写しゃ楽らくの顎

兵庫 三枝 邦光

冬萌の脇本陣に庭雀  
湖望む天守一刻冬没日  
冬雲のいつしか崩れ比良比叡  
虎落笛船板塀ほそに柄ほその孔  
秘めごとの二つや三つ懐手

兵庫 水野 範子

晩年は父より母似花八つ手  
菊人形ロボットのごと歩みませ  
そぞろ寒手から離せば物忘れ  
小春風羅漢の一つ口あんぐり  
世につれて和菓子わがしの店も聖樹立つ

# 薬草歳時記

(一三〇) イタドリ (虎杖・虎杖根)

## 三輪慶子

虎杖を銜へて沙弥や墓掃除

川端 茅舎

イタドリの味を覚えておられるでしょうか。仲春の芽出しの頃に、ウドのような新芽が出てきます。これをすぼくと折りとって、皮をむいて口にしますと、独特の酸味があります。街育ちでは無理ですが、田舎道を通学したものは忘れられない舌の記憶です。

イタドリはタデ科の多年草。日本全土に分布しています。一番ポピュラーな山菜でしょうか。タケノコのように伸びる若芽の外皮を除いて食用にします。生食したり、水にさらしてお浸しにします。塩漬けにして保存することもできます。シュウ酸を多く含みますので、食べ過ぎてはいけません。

イタドリの茎には紅色から紅紫色の斑点があるので、虎杖と言うのでしょうか。

薬用には根茎を使い、虎杖根といえます。抗菌鎮咳作用、利尿作用があります。イタドリと言う名のとおり、膀胱炎

や膀胱結石の痛みを取る、また関節痛やリウマチにも効能があるとされています。月経不順や夜尿症、緩下剤としても使われ、昔は重宝な薬草だったのでしよう。

蛇に咬まれた時に、葉を揉んで効くという記載もあります。蛇に咬まれた時に、葉を揉んで効くという記載もありません。

夏から秋に白い花が咲きます。円錐花序です。多年草ですから毎年同じところに芽を出すわけです。実はスケッチの須賀さんが、我が家の庭でイタドリを見つけたことから、私がこの原稿を書くことになったのですが、イタドリはガーデンングにも面白いかもしれません。オオイタドリは葉も大きく、秋の紅葉も楽しめます。

イタドリ、スイバ、ギンギシ等タデ科の多年草は畑の厄介者ではありますが、歳時記ではそれぞれ独立季節として扱われています。

イタドリ、スイバは雌雄異株、ギンギシは両性をもちます。葉の形も少しずつ違いますので、一番身近な植物学の教材です。

### 参考文献

「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館  
「中薬大辞典」小学館

### 著者略歴

神戸薬科大学卒

イタドリ〔タデ属〕(たで科)

*Polygonum cuspidatum*  
Sieb. et Zucc. (虎杖)

4月中旬(六甲山系)

須賀悦子画



円錐花序  
(白~淡緑色)  
9月中旬



虎杖の太きを手折る音が佳し	虎杖を子が噛む牛になりたくて	虎杖や干されどほしの父のシャツ	最上川みる虎杖を手に余し	虎杖は城堡の花石の花	いたどりや海のぞく貌はやて打つ	虎杖や古屯田の墓所構え	いたどりの一節の紅に旅曇る	山陰に虎杖森の如くなり	いたどりも壇のつつじの木間哉
武智 恭子	品川 鈴子	廣瀬 直人	皆川 盤水	山口 誓子	角川 源義	河東碧梧桐	橋本多佳子	正岡 子規	池西 言水

ぐらっけ

# 鈴の奏

品川鈴子選

水彩画乾くちぢみや冬麗 愛媛 梁瀬 照恵

誰か来よ冬麗らかなお八つ刻

故老より所作事習ふ年の暮

手を振りて別れの駅に暮はやし

花八ツ手妻にも欲しき休息日

無人駅落葉を風が連れて行く

そぞろ寒愛用の杖持ち去られ

いつからかシニアと呼ばれ年迎ふ

胸底の残り火のごと冬紅葉

百合鷗赤い日してしわい声

別るるをよしとしている懐手

懐手解かぬままなる別れかな

辨慶の口上に泣く十二月

腰痛の宿痾となりて年暮るる

校庭に人のいなくて日短か

我が店に客足遠く糸糸編む

店番の椅子に編みかけ糸糸玉

兵衛 先山 実子

大阪 丸 美砂子

埼玉 向江 醇子

兵庫 市橋 香

黄落のバスの延着詫びことば

紅葉狩腕に縊りかけ手弁当

秋空を対角線に飛行雲

葬の寺憚らずして鴟猛る

鴟猛る暗峠越え来しか

柚小屋へ爪先上り芒路

野の佛日がな芒にくすぐられ

ひとつづつ埋めゆくパズル山粧ふ

逢ふまでのマフラー長く長く編む

着ぶくれて年齢性別不詳なり

日向ぼこ勝手疊を決め込みて

猫「匹」の「の」の字「の」の字に小春かな

眠りたる山を後目に観覧車

もらい湯の母の背で見たオリオン座

木洩れ日の千姫園に石路明かり

短日や友の手術は午後六時

冬の雨嬰の心音聴くような

大阪 竹内 方乃

香川 辻 雅子

兵庫 岡村 尚子

兵庫 正木 泰子



# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句く十五句 加藤奈那 ”

\*選句は全て 品川鈴子

故老より所作事習ふ年の暮

梁瀬 照恵

百合鷗赤い口してしわい声

丸 美砂子

昔の芸芸ごとに秀でた長老から、振事ふりごととも呼ばれている稽古を受けるのも、年末の欠かせない予定のひとつで、数え日の忙中にも雅みやびやかな閑あり。そして新年にはその技を披露するのもかもしれない。

所作事とは歌舞伎の舞踊曲のことで、その伴奏は長唄・常盤津・清元など。いずれも習う人も師匠も少なくなるばかりの粹なお稽古。

花八ツ手妻にも欲しき休息日

先山 実子

腰痛の宿痾となりて年暮るる

向江 醇子

八ツ手はどちらかと言えば、目立たない裏庭や日陰向きの木。大きな手のような葉が福を招くと云われ、古い家などに在ってたくましさを感じさせる。花も庶民的な趣で、飾らない風情が、いかにもベテランの主婦に通じる。家事に専念して夫を支えた年月を省みると、この辺でちよつと休息する日も欲しくなる古女房。

電気療法、鍼灸等色々々と試みてるが、近ごろはすつきりと直らない腰痛、どうも持病になってしまったらしい。あれこれと思いを巡らす年の暮。さらりと詠んでいて深刻さを感じさせない作者、明るく年を重ねている姿がうかがえる。

店番の椅子に編みかけ糸糸玉 市橋 香

もらい湯の母の背で見たオリオン座 岡村 尚子

店の奥の椅子に置かれている編みかけのセーター、二本の太目の編み棒、ふんわりとした糸糸玉、動いているものは何ひとつない、音もない。

私は一枚の西洋の絵画を見ている。

葬の寺憚らずして鴟猛る 竹内 方乃

年金でシクラメン買ふ街角に 正木 泰子

静かに葬が執り行われている山の寺。澄みきった空、キーツ、キーツ、キキキ・・と鋭く鳴く鴟へ「憚らずして」という思いを込めた表現に賛否はあるうが、この鴟の高音が、死の悲しみを一層深くしている。

街角の花屋に売られているシクラメン。紅、白、ピンクどれも瑞々しい。二・三日前も欲しいと思いつつながら通り過ぎた。そうだ今日は年金が入った日である。シクラメンの鉢を掲げていそいそと帰る作者が見える。

ひとつづつ埋めゆくパズル山粧ふ 辻 雅子

冬帽を被せ買物メモ渡す 羽生きよみ

ひとつづつ文字を埋めてゆくパズル、時間も忘れて夢中になつてしまう。謎解きの答の言葉が後少して解けるまでにこぎつけた。ほっとして、窓の外を見ると鮮やかな秋の山。パズルと山粧ふの取り合わせが妙である。謎解きの答も、秋の季語ではないかと、想像が膨らむ。

小雪が散らついてきた。子供（あるいは孫かも）にお使いを頼んだものの心配な作者、帽子もしっかりと被せ、買い物メモも渡す、「車に気をつけるですよ」と言う声も聞こえる。冬帽の季語が働いた、女性ならではの句である。